

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受郵便誌第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
平成二十一年五月一日発行(第百十二巻第五号)

# ホトトギス

五月号



## 俳句随想 〔三百二十三〕

汀子

「天地有情」の投句用紙の裏に通信欄がある。そこには投句される方々が何か私に伝えたいことがあればお書き頂いている。それは一枚ずつ選句した後読ませて頂く。ご挨拶を書いて下さる方、「ホトトギス」に対してのご希望、ご意見など様々な事柄に及ぶ。ある時、ある俳誌に対しての怒りがあった。選句を中断して書庫に行き、整理されてある俳誌の中からその号を取り出してその指摘されている部分を読んだ。「先生を喜ばせる法」と題し細かくその方法が書かれてある。怒った投句者は「私は即刻この俳誌を止める」と書いてある。私はその書き出しには驚いた。何故このような書き方しか出来なかったかと腹立たしかった。若い主宰であるが、世間一般から言うとそのほど若くはない。

ここでは「先生を喜ばせる法」とあるが、私は「先生に喜んで頂く法」と何故しなかったのかと思う。素晴らしい俳句を作ったら先生は喜ぶが、先生を喜ばすために素晴らしい俳句を作るのではないことに彼は気がつかなければならぬ。

「お金をあげたら喜ぶ」というのは言語道断。これは人を見下す最低の方法であると知らねばならない。

旬日記 汀子

平成二十年五月三日 菅屋ホトギス会

水音のそこに生るる水芭蕉  
忘れものせしかに薄暑とは身軽  
怪我をせし人の消息聞く薄暑

五月四日 関西野分会

木洩日も若葉の色でありにけり  
風向きを告げ高速路鯉幟  
快晴の朝みどりの日なりけり

五月四日 下朝句会

行春の旅の手順のととめひし  
牡丹の咲き終はりたる名残あり  
海越ゆる卯月の旅の待つてをり

五月五日

みどりの日とは快晴の似合ひけり  
五月五日 ロイヤル吟行会 ホテル界隈

この会のすめば湖畔に泊つ立夏  
ホテルには見掛けぬ子供供の日  
フアッシュヨンは少し立夏に魁けて

五月六日 有恒俳句会吟行会 琵琶湖クラフ

快晴の朝へ涼しき星生れ  
真夜晴れて夏の星座を観る宿り  
北小松駅は薄暑の山路色尽す

五月八日 清交社

鯉幟揚げて風なき日なりけり  
マンションは仮の滞在花木  
風見せて庭の木洩日夏めける  
子等はもう一家をなせり鯉幟  
夏めきて仕事軽になりしこと  
滞在やれんぐわ通りの花木

変更の出来ぬ予定の夏めける  
五月八日 工業倶楽部

卯浪越えゆける大橋渡りけり  
初夏といふ身軽な旅でありしかな  
記憶なほ余花にすぎなきてをりにけり  
み吉野の余花も散り尽く頃ならむ

五月十日 四国ホトギス同人会

安全と知る観潮船つまらなく  
船酔を怖れし人も乗る卯浪  
卯浪越え来しも阿波へは陸つゞき  
アカシヤの花の旅路を濡らす雨

五月十一日 四国ホトギス俳句大会

眉山を巻くやうで巻かざる卯浪かな  
五月十一日 大阪倶楽部

母の日の予定通りの旅となる  
母のこと思ひ返して母の日よ  
確かめてやぬ眉山のほととぎす  
確といへぬ高さやを仰ぎけり

五月十三日 綿業倶楽部

同じ色咲きて孤高の都草  
五月十三日 大阪倶楽部

牡丹の崩るときを旅にあり  
いくたびも初夏あともどりしてしまふ  
考へるととき牡丹の花の中  
初夏の旅終へて不順の日に戻る

五月十五日 クラブ合同 大阪倶楽部

牡丹の心の夜風少し  
快晴のまこと短夜なりしかな  
風去なしきれざる牡丹崩れけり  
五月十九日 朝日カルチャー吟行会  
これよりの雨に備へけり

咲き移るものを若葉につなぎたる  
五月二十日 無名会

雨止みてマーガレットの昏れ残る  
旅人にマーガレットの朝の来し  
山宿の早起夕餉の眺山女  
山女かかとうて箸とる峽の宿

五月二十一日 夏潮句会

釣れしかと山女かと皆魚籠覗く  
催問の電話がへのなき新樹晴  
朝の間の電話がへのなき新樹晴  
植ゑられし五月の庭にジャカラ

五月二十一日 夏潮句会

開いてゐる五月の木戸を通りけり  
空晴れてまこと五月となりしかな  
旅五月雨のち晴又雨のち晴  
尽すまで掃かぬも楠の落葉かな

五月二十二日 きせらぎ会

薔薇抱いて四十五分空の旅  
祭町抜ける渋滞はじまりし  
薔薇の影踏みばらの香に包まるる  
あきらかに祭帰りと思はるる

五月二十三日 時雨句会

菖蒲湯をその香まとひて上り来し  
旅を開けて閉めて薄暑の人数に  
旅靴薄暑の心つめてをりに  
菖蒲湯にありても正座五分かな

五月二十四日 句会と講演の会

風心地よきと思へば薄暑かな  
五月二十四日 句会と講演の会

五月二十五日 野分会

麦藁は燃やす煙へ高速路  
締切は過ぎし稿債旅薄暑  
光る雨若葉を包みはじめけり  
少し褪せたる鯉幟泳がせて  
やがて木を語る若葉となりけり

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年五月一日 蕉心会

更衣したのに誰も気付けへん  
夏近し水軟らかき隅田川  
上着てふ薄暑の迷ひありにけり  
大川の水凸凹と夏近し  
メーデーや水も色めき立つてをり  
授かりし一句遮る日傘かな  
風蘭のあなたと紛ふ香りかな  
康生氏呼ぶ風蘭の香でありぬ  
風蘭の香で丘蜂氏いちころに  
五月七日 一水会

新茶淹れ二十五年といふ節目  
五月七日 百夜句会

卯浪寄す銀座の老舗一つ消え  
六甲の端山を模糊と夏霞  
夏来る女性専用車両かな  
五月八日 土筆会

柿若葉子規の庭とはこの辺り

虹鱒の七色に釣り上げられし  
虚子を知る人又迎へ卯月かな  
川といふ卯月の蛇行ありにけり  
輝きは空との対話 柿若葉  
五月九日 虚子記念文学館投句

似顔絵の虚子の鼻筋夏めける  
五月十日 四国ホトギス同人会、大会

夏霧の追越車線ごぼう抜き  
観潮を終へし安堵の二三人  
老鶯に呼応してゐる渦かとも  
時鳥鳴いて眉山を野らしゆく  
ロープウェイ花椎の香に触れて着く  
モラエスの語り部なるや時鳥  
五月十二日 朝日カルチャー若草句会

一服は新茶とセブンスターかな  
その話先づは新茶を淹れてから  
菖蒲の日城主の裔といふ漢  
五月十五日 登高会

ビル工事音夏めいてをりにけり  
蝦蛄茹でてより開店の老舗かな  
夏めきて猫饒舌となりにけり  
結界は過去と現代 賀茂祭  
やる気なささう先頭の諸鬢  
蝦蛄嫌ひ海老は中るといふ佳人  
五月二十日 草木瓜会

牡丹の崩れし時の気品かな  
白牡丹咲き疲れたる紅かとも  
羽音寄せ牡丹襲を整へり  
夏めきて稲城野いよよ膨らめり  
夏めける稲城は嵐去りてこそ  
五月二十四日 ホトギス社句会

道をしへシユラインロード尽きて句碑  
斑猫と君六甲を知り尽くし  
斑猫に急かされてゐる行者道  
五月二十六日 成田山開基二〇七〇年祭記念俳句大会

奥の院暗し涼しと潜りけり  
総門を磨き上げたる若葉風  
五月二十七日 若水句会

亜米利加は遠くて近き花水木  
柏餅今日逆上り出来ました  
夏霞山を削つてゆきにけり  
柏餅平家の裔は語らざる  
花水木敵たりし日を遠くして  
五月二十八日 目黒学園句会

新緑に標高変へる端山かな  
幹太き方へ新緑立ち上がる  
泥の色砂の色して烏賊釣られ  
難罌粟や虞氏の魂風となり  
新緑といふ三色でありにけり  
離れゆく鳥賊火は星となりにけり

# 雑詠

## 廣太郎 選

マスクして思ひがけなき美人なり	檀原 稲岡 長
マスクして悩むが如き眉目かな	同
泪目でほほゑんで見すマスクかな	同
日本に富士あり小六月のあり	福山 竹下陶子
文明の世に雑炊といふ文化	同
ホ句の火を玉と抱きてしぐれぬし	同
歩を返す花つけてぬし冬草に	福岡 松尾緑富
寒菊や庭の一隅占めてをり	同
寒菊に二人暮しの変りなく	同
もつれたる会議ほどけて日短	神戸 山田弘子
短日や電子の声に指図され	同
背ボタンを外しあぐねて日短	同
富士が富士らしく十一月の貌	相模原 木村享史
のつぼなり十一月の影法師	同
三十年経ちても年尾忌の仲間	同
山茶花の白花の白さ摩耶の荘	たつの 浅井青陽子
黄葉の摩耶山よりの贈りもの	同
冬草と云ふも濃き色名苑に	同

隻眼の冬日の踊る石舞台	八尾 岩垣子鹿
大仏は飛鳥の躋よ山眠る	同
仏より神へ時雨を歩きけり	同
漆黒の闇に星飛ぶ峰の寺	京都 安原 葉
冬近し身にふりかかると一転機	同
雑踏をはなれきし路地笹鳴ける	同
冬虹といふつつまじきねがひあり	熊本 岩岡中正
天使ミカエル冬の虹よりあらはるる	同
冬薔薇の真紅をルソー墓前かな	同
冬木立湖が見え来て枯木立	熱海 嶋田一步
病室が今の住所よ冬木立	同
冬木立ぼつりぼつりと人通る	同
日が差して紅葉全山焰あげ	同
紅葉バス孤独の旅を授かりし	嶋田摩耶子
山茶花の咲き溢れ地に散り溢れ	同
心身の浮かむ思ひや干蒲団	東京 内藤呈念
水仙の群がり咲きてなほ静か	同
霧水咲き魁夷の白き絵となりぬ	同
商ひのぼちぼちでんなど注連飾る	橋本くに彦
著ぶくれて両手に余る福袋	同
もう開けてゐる買初の福袋	同
寒林や無が満たしくれたる心	香川 湯川 雅
残菊の蕾残さぬやうに咲く	同
水餅を取り落したる水の中	同

# 雑詠句評（四月号より）

仁義・しげ人・雅

昭代・比奈夫・暮潮

純也・弘子・くに彦

一步・廣太郎

冬帝に起こされ病める吾をりし 熱海 嶋田 一步

冬帝は、冬の厳しさを司る神というような意味。いま作者は、冬帝に起こされたような気がして深い眠りから目覚めた。そしてそのときに作者は、自分が未だに病床にいるのだということに、あらためて気付いたのである。「病める吾をりし」に、そのときの作者の心地がよくあらわされている。何もかも神の御意志に任せている作者の心が、読む人によく伝わってくる。さらにこの句は、この作者以外には体験することのできない、唯一の貴重な句とも言えよう。（仁義）

御恙の作者である。病床におられても。季節は違ふ事なく巡ってきて、春や秋の季候の良い時期はともかくとして暑い夏や、こ

の句にあるような厳しい冬の時期を迎える時はさぞお辛い思いをされておられるだろう。それでも季題を友として必死に過ごしておられる作者の様子が伝わってくる。（廣太郎）

遙か来て訪ふ水竹居偲ぶ秋 京都 安原 葉

十月十八日の九州ホトトギス同人会での一句である。赤星公園には、水竹居の旧居、資料館、「牡丹観音」の呼び名で親しまれている六角堂がある。六角堂からやや奥まったところには虚子句碑「牡丹観音参るえにしの無き旅に」と水竹居句碑「風鈴の鳴らねば淋し鳴れば憂し」が並ぶように建てられている。

遙々と熊本・八代に着かれ水竹居旧居を訪ねられた作者である。赤星公園の何もかもが水竹居を偲ぶものであり、それはそのまま相年の師である虚子を思うことにも繋がってゆく。「遙か来て訪ふ」と淡々と事実を叙し、気持ちを抑制したことが却って水竹居への思いの深さを滲ませている。その思いを深めるとともに受け止めているのが季題の「秋」である。秋の情が染み渡る句である。（しげ人）

赤星水竹居を知らなければホトトギスでもぐりである、とはちよつと大袈裟で失礼ではあるが、虚子、丸ビルの縁は多くの方の知るところである。その水竹居旧居が熊本県八代にあり、ホトトギス大会で何う機会を得た。その時の句であるが、その縁をひしひしと感じておられるのである。（以下略）

# 天地有情

# 子選

打つて出る虚子文学館春を待つ  
初戎潮騒に似しぞめきかな  
躍りつつ竹瓮沈んでゆきにけり  
竹瓮上ぐ芥も捕れてをりにけり  
ダイヤ婚露の世共に生き抜きて  
執刀医成功告げる寒燈下  
蓮根に限らず宇宙がらんどろ  
生かされて今小春日を浴びてをり  
春暁や草木虫魚盛んなれ  
春暁や 根 原 的 な 生 思 ふ  
きりもなき落葉と云ふも今朝も掃く  
降り散れる銀杏落葉の日溜りに  
色かさねをるらむ真夜のかの紅葉  
ジャガランダまでは未枯及ぼざる  
翁忌の不在投句を許されよ  
明日はなきこの冬紅葉かと仰ぐ  
冬葦気儘歩きの歩を止めて  
外れて来し山がかる道寒葦

榎原 稲岡 長  
同  
東京 稲畑廣太郎  
同  
石川 辻口八重子  
同  
東村山 村松紅花  
同  
豊中 瀧 青佳  
同  
たつの 浅井青陽子  
同  
京都 安原 葉  
同  
神戸 山田 弘子  
同  
福岡 松尾緑富  
同

星空へ星空へ生る霧水かな  
草霧氷光が風となりしかな  
初霞棚引く野山ありてこそ  
老にまだ書くこと残り初日記  
黄落に座せばたちまち聖家族  
肩組んでゆくやうに冬日と歩く  
寒鴉水浴びて鯉おどろかす  
寒鴉水浴びながらこちを見る  
短命の家系に長寿冬夕焼  
恬淡と生くるは難し冬桜  
病む吾にクリスマススイブ過ぎてゆく  
病む吾に俳句は力なり聖夜  
譲られし席に吾の老著ぶくれて  
輝きて蜜柑の山は眠らざる  
事始義理のきびしくうつくしく  
朝霜や腰かがめ掃く先斗町  
貫ひ来し小枝嬉しや寒の海  
無造作に紅梅挿して壺据わる

東京 河野 美奇  
同  
神戸 後藤比奈夫  
同  
熊本 岩岡中正  
同  
東京 今井千鶴子  
同  
徳島 上崎暮潮  
同  
熱海 嶋田一步  
同  
同 嶋田摩耶子  
同  
箕面 井上浩一郎  
同  
千葉 増田善昭  
同

# 天地有情句評

## 汀子

再びとり戻されし健康への喜び。

春暁や草木虫魚盛んなれ 豊中 瀧 青佳

自然への存問で迎える春。

降り散れる銀杏落葉の日溜りに たつの 浅井青陽子

輝く銀杏落葉に誘われて。

色かさねをるらむ真夜のかの紅葉 京都 安原 葉

真夜の冷えが紅葉の色を深める。

明日はなきこの冬紅葉かと仰ぐ 神戸 山田弘子

最高の今日の冬紅葉。

(以下略)

春のイペントへの抱負。

打つて出る虚子文学館春を待つ 榎原 稲岡 長

躍りつつ竹盆沈んでゆきにけり 東京 稲畑廣太郎

竹盆を沈めるときの期待の姿。

ダイヤ婚露の世共に生き抜きて 石川 辻口八重子

結婚六十年を助け合った日々への感慨。

生かされて今小春日を浴びてをり 東村山 村松紅花